

# 平成21年度 情報工学コース卒業研究報告要旨

|        |                           |       |
|--------|---------------------------|-------|
| 間瀬 研究室 | 氏 名                       | 福井 克佳 |
| 卒業研究題目 | スポーツ指導者育成のための指導者注視動作の比較検討 |       |

## 背景と目的

スポーツにおいて指導者の役割は非常に重要であり、多岐にわたる。そのため指導者には様々な能力が必要とされる。中でも特に重要な能力は技術指導能力である。その中の1つとして学習者の矯正点を見つけ出す能力が挙げられる。しかし、初級指導者育成のために、上級指導者が持つ学習者の矯正点を見つけ出す能力を伝えることは行われていない。そこで、本研究では上級指導者の注視動作を測定することで、学習者の矯正点を見つけ出す能力を初級指導者に伝えることを目標とした。そのための前段階として、指導経験者と指導初心者が学習者の矯正点を見つけ出す際の注視動作を比較した。

## データの収集方法

視線測定システムを装着した被験者に、6個のスキーの動画を閲覧させた。それぞれの動画について「矯正が必要であると感じる点」を探させて、その際の視点データを記録した。

## 分析1

1/60秒ごとに記録された視点データの、視点の移動距離について分析を行った。その結果、指導初心者の1人には、視点の移動距離が大きい移動(図1)が注視動作の中で5%前後の頻度で見られた。また指導経験者のうちの1人にも、6個の動画のうち1つにのみ同様の動作が見られた。これは普段注意している点だけでなく、ほかの点にも意識が向いてしまっているためではないかと思われる。特に指導初心者は矯正点を探すことに慣れていないため、注意が散漫になりやすいのではないかと思われる。

## 分析2

はじめに体を頭、腰、左手のストック、右手のストック、左足元、右足元をそれぞれ中心とした6つの領域に分けた(図2)。続いて視点座標と各領域の中心との距離が最小である部位に対し、視点がその部位の領域に入っているかを調べ、データ収集の際に得た「矯正が必要であると感じる点」との関連を調べた。その結果、矯正点を探す際には、必ずしもその点に関する部分だけを注視しているのではないということが分かった。



図1 視点の移動距離が大きい移動の例



図2 体の各部位の領域の例